

## Y27c 天文学者の地理的分布

藤沢健太 (山口大学)

天文学の発展には、最先端の研究に加えて、教育、そして文化としての学問の普及が必要である。これを実現するためには、社会の中に適切な数の天文学者が適切に分布し、各々の環境を生かした研究と教育をすることが必要と思われる。現在、天文学者は社会の中にどのように分布し、どのような研究や教育活動をしているのだろうか、また適切な天文学者のあり方とはいかなるもので、どのようにそれを実現できるだろうか。

この問題意識に従い、第一歩として天文学者の分布（所属機関と都道府県分布）を調べた。調査は日本天文学会会員名簿（2012年版）を資料とし、今回は対象を一般会員と学生会員に限定した。調査方法は（1）所属機関毎の人数を調べる、（2）所属機関の所在地を都道府県別に分類するというものである。対象となったのは一般会員 981 人、学生会員 358 人である（名簿に所属の記載のない方約 400 人は調査の対象外とした）。

所属機関別分布（一般会員）：国立天文台 15%、その他の国立研究機関 18%、旧帝国大学 26%、その他国立大学 18%、公立大学 3%、私立大学 16%、公共天文台 4%。一般会員は様々な機関・大学に分布している。（学生会員）：国立天文台 4%、その他の国立研究機関 3%、旧帝国大学 50%、その他国立大学 30%、公立大学 5%、私立大学 8%。学生は旧帝国大学・国立大学に強く偏って分布している。

地理的分布（一般会員）：33%(323 人)が東京都に集中している。その他の集中地域は旧帝国大学所在地と大研究機関所在地（茨城県、神奈川県など）である。3 県では一般会員（学生会員も）が 0 人、9 県では一般会員が 1 人だった。天文学者は地理的に大きく偏った分布をしていることがわかる。都道府県別人口比を見ると、最も天文学者密度が高いのは京都府（一般会員 27 人 / 100 万人）である。